

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会 統一見解とコメント

平成4年1月28日
気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

雲仙岳では、昨年11月下旬に第5ドームが、12月上旬に第6ドームが形成され、最近では第6ドームの西方で新たな隆起が起きている。溶岩ドームの崩落に伴う火砕流は主に水無川・赤松谷方面に流下しており、おしが谷方面にも時々発生している。溶岩ドームの成長からみると、マグマの1日当りの噴出量は11月までとほぼ同様と考えられる。昨年10月下旬に始まった火口直下の地震活動は今なお活発に続いており、5月、8月、9月の地震活動に比べて継続期間が長く回数も多い。これはマグマが火口直下で長期にわたって周囲の岩石に歪を与えている結果と推定される。

水準測量によれば、溶岩噴出に伴って5月から8月にかけて山頂部は沈降を示し、さらに8月から10月にかけて西山腹の沈降があったが、10月以降は僅かであるが隆起に転じている。辺長測量によれば、山頂部は依然として変形が進行している。また、地磁気観測によれば、地下の温度上昇も続いている。地震活動の長期化も含めて、以上の観測結果は地下深部からのマグマの供給が続いていることを示している。

以上のことから、今後もマグマの供給が続き、溶岩ドームは成長を続け、崩落を繰り返すと予想される。大規模な崩落による火砕流が赤松谷、水無川、千本木方面に影響を及ぼすことが考えられるので、引き続き火山活動に厳重な警戒が必要である。

なお、降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。

平成 4 年 2 月 28 日
気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

雲仙岳では、第 5、第 6 ドームの成長が続いており、そこから主に赤松谷方面、水無川方面に火砕流が流下している。2 月には大きい火砕流が赤松谷方面に流下し、その規模は昨年 9 月 15 日以来のものであった。現在第 6 ドームの付け根で溶岩の湧き出しが続いており、その付近及び第 5 ドームの隆起・変形が盛んである。溶岩ドームの成長や堆積物の量から見て、マグマの 1 日当りの噴出量は従来と同程度と考えられ、活動開始以来の総噴出量は約 8 千万 m^3 と推定される。

最近実施された島原半島西海岸の水準測量では、1990 年 11 月を基準として最大 3 cm 程度の沈降が測定され、その沈降容量は 2 ～ 4 千万 m^3 と見積もられ、現在までのマグマ噴出量に対応した沈降と考えられる。今回の一連の活動が半島西部の地震活動から始まったことを考えると今回見出された沈降は、マグマの供給システムに密接に関係していると考えられる。西山腹及び山頂部の水準測量でも 1 2 月と比べて若干沈降しているが、その量は小さく、従来同様この領域では大きな地殻変動が生じないと判断される。

昨年 10 月下旬に始まった火口直下の地震活動は引き続き活発に続いている。

溶岩ドームでは夜間に赤熱部分が見られ、山頂部から多量の火山ガス放出が続いている。地磁気観測によれば従来と同程度の率で地下の高温域の拡大が続いており、地電位観測からは地下の熱水活動が高い状態にあることが推定される。

以上のことから、今後もマグマの供給が続き、溶岩ドームは成長を続け、崩落を繰り返すと予想される。当面火砕流の危険が高いのは赤松谷、水無川方面であるが、依然として千本木方面への危険性も去っていない。今後も火山活動に厳重な警戒が必要である。

なお、降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。